

小学校体育「フェンシングの授業」の試み

—小学校2年生の実践から—

森 勇示
愛知教育大学

Attempt of the Elementary School Physical Education “Fencing”

— from the Practice of the Second Grader —

Yuji MORI
Aichi University of Education

キーワード：体育，フェンシング，対戦型

Key Words：physical education, fencing, fighting type

1. 問題意識と目的

小学校の教科体育^{注1)}の内容にフェンシングはない。学習指導要領では、フェンシングのように剣を持ち相手と対戦する内容に剣道があるものの、それは中学・高校で取り扱う内容になる。あえて小学校の体育授業でフェンシングを計画したのは理由がある。それは、運動やスポーツをする際に生じる感情的な軋轢をどのように処理するか、これを体育で経験し学べるにはどうすればよいか、という問題意識に基づいている。関連してオリンピック・パラリンピック（以後「オリ・パラ」と表す）教育¹⁾が体育の内容として教育課程上に位置付けられた。「オリ・パラ」教育は中学と高校では「文化としてのスポーツ」²⁾³⁾の意義を学ぶことになっている。しかし小学校では「ルール・マナー遵守」「フェアプレイ」などを「各種の運動を通して触れることができるようにする」⁴⁾と解説されており、通常の体育と何も変わらない。「オリ・パラ」教育であるなら、通常の体育とは違う「オリ・パラ」種目の運動を通した体育である必要があると考えた。

体育の内容には競争の学習があり、そこには競い合う相手に対するフラストレーションが生じる可能性がある。このフラストレーションは単に

ルールやマナーを盾に教師が訓育的に説諭すれば解消するのと言え、それだけでは決して十分ではないと思っている。競争は主として陸上運動（競技）^{注2)}、ボール運動（球技）、武道などで学ぶことになる。これらの領域では「勝敗を受け入れる」「相手を尊重する」ことを「学びに向かう力、人間性等」の学習内容としている。この内容が学ばれるために不可欠なことは「勝敗」を競う「相手」である。にもかかわらず、記録測定だけの競争しない陸上競技⁵⁾や基本動作だけ行う試合のない武道の授業⁶⁾もある。このような授業には「勝敗」を競う「相手」はいない。ボール運動（球技）では「勝敗」を競う「相手」と試合前後に挨拶をするが、その中には不快感を顔に表したまま頭を下げる生徒がおり、形式的な挨拶に過ぎないと感じることがしばしばある。低学年の体育ではトラブルがしばしば起り、子どもが泣いたりする。「○○ちゃんがズルした。」と訴えても、仲良くすることを当事者に求めるだけで問題を即決してしまう教師もいた。

運動経験が未熟な低学年の子どもが感情的に不満を訴えることがあることは容易に想像できる。問題は、おとなになってまでトラブルに適切に対処できず感情の赴くままに行動してしまうことだと考える。今日（本稿執筆時点）の運動遊びの減

少⁷⁾⁸⁾やカードゲーム・ビデオゲームの台頭は身体接触をとまなう感情的な軋轢を処理する機会を子どもから奪っていくものと予想している。

ボール運動(球技)には身体接触を経験する機会があるものの、そもそも接触を禁じることがルールにある。武道には相手との接触をとまなう攻防が前提とされているが、中学校からの経験では遅いと考ええる。

以上のような問題意識から、あえて相手と接触をとまなうような対戦型の学習が小学校から必要だと考えた。対戦により「勝敗」を競う「相手」と感情的な軋轢をもたらし、その経験から寛容さを得ることが期待できるような学習である。加えて「オリ・バラ」教育の内容「ルール・マナー遵守」「フェアプレイ」を「オリ・バラ」種目を通じて経験し、その学習経験が中学校の学習への接続として期待できる運動を想起した。その結果、フェンシングを簡易化した教材を試行的に実践しようと思い立った。本稿ではフェンシングの教育課程上での位置付け、教材の簡易化、試合中に見られた特徴的な場面、それを経験した子どもたちの内的な状況を絵日記という形で収集した結果を報告する。以上が本稿の目的である。

2. フェンシングの教育課程上の位置付け

体育の中で身体接触をとまなう対戦型の領域には武道がある。中学校の武道には柔道、剣道、相撲の3種目がある^{注3)}。小学校では体づくり運動の例に「すもう」の類いが示されている⁹⁾。ところが「すもう」は体づくり運動では力試しの運動(遊び)・力強い動きを高めるための運動の例として示されているので武道とは学習目的が異なると考えた。目的を変えて取り扱うこともできるが、一般に「すもう」は体格が大きい方が有利であり、小柄な子が劣等感を抱きやすい。柔道も同様の理由がある。体重別に対戦する方法もあるが、学習集団の分断は望ましくないと考えた。

そこで剣道をイメージすることからまず考えた。ちょうどフェンシングを実施する前年度、本稿に関係する授業者が剣道をイメージしてスポーツチャンバラを簡易化して学習を実践した。スポーツチャンバラは剣道の学習ではないが、対戦

し叩き合うので身体接触をとまなう感情的な軋轢がある。この実践ではウレタン製の「ソフトチャンバラ」(68cm)を剣として使用し一定の成果があると感じたものの、激しい叩き合いで剣が何本も折れてしまった。この時、剣を縦横に振らなければ折れる可能性は少ないと感じ、「突く」攻撃を主体とするフェンシングを思い立った。

フェンシングの精神的な理念の背景に騎士道がある。それは12世紀のフランスで理想化された一連の「ビヘイビアー(身の処し方,振る舞い方)」が進化したものと考えられている¹⁰⁾。現代でもフェンシングの競技規則に試合の作法が残されている。一方で、我が国の剣道では「剣道の理念」¹¹⁾が定義されている。それは「剣の理法の修練による人間形成」や「人類の平和繁栄に寄与」する心構えが謳われている。フェンシングと剣道を同一視することはできないが、両者は歴史的に殺戮の手段として用いられていた技術を系統的に構成し、人間形成や教育の内容に採り入れられた点で共通する。

小学校の教育課程(学習指導要領)を考えた場合、フェンシングを武道の学習として位置付けることはできない。そこで、対戦から感情的な軋轢が生じて相手と敵対的な関係にならないよう交流を学習の目的とした。体育には「体ほぐしの運動」に交流目的がある。小学校学習指導要領解説では、この交流の内容を「みんなで関わり合ったりすること」と表し以下のような説明と例示が記されている¹²⁾。

みんなで関わり合うとは、人それぞれに違いがあることを知り、誰とでも仲よく協力したり助け合ったりして運動遊びを行い、友達と一緒に体を動かすと楽しさが増すことや、つながりを体験することである。

〔行い方の例〕 伝承遊びや集団による運動遊びを行うこと。

上記解説をふまえ、交流目的の運動遊びとしてのフェンシングを体育の教育課程として位置付けた。

試合は「①サリュール」「②アンガルド」「③アレ」で開始し「アルト」で停止する。単元初期に試合開始の作法と得点になる例について、授業者が2人の子どもを選び演示させながら説明した。

その他のルールについては寛大に対処することとした。その理由は本実践の対象が小学校2年生であることから、小学校低学年の「遊び」^{注4)}の趣旨をふまえることと、フェンシングが体育に導入しやすくなるように考えたことによる。あわせて、筆者がこれまで見てきた武道の授業では、基本動作、基本技、礼法などの学習に時間を割き、結果的に試合ができずに終わっていたことが多かった。これを批判し、すべての学習内容は試合の文脈と結びついて学ばれる必要があると考え、まず試合をすることを重視した。

4. 試合中に見られた特徴的な場面

授業は11月に4時間、1月に1時間行った。1月の授業は近隣の高校フェンシング部の生徒と対戦した。

4-1. 単元開始時

単元序盤ではどの子も試合開始の作法はとれていた。ただし、剣の構え方は様々な形態が見られた。写真6は2人とも剣を両手で持ち、上方に振りかぶっている。これは低学年「遊び」の趣旨から専門的な技術指導は割愛しているからと考えられる。



写真6 様々な構え



写真7 アタック時の様子

フットワークでは競技選手のように両脚を前後にスライドさせるような動作が数人に見られたが、日常の走・歩のように左右脚が入れ替わる動きをしている子が多かった。それでもアタックの時は剣を片手に持ち、片脚を踏み出していた。写真7では両者同時に突いているが緑1の方が先に当たり得点になっている。剣は片手で持つことでリーチが稼げることはどの子も体感的に気づいているが踏み込みの脚の優位性については、それほど気づいていないようである。

単元序盤では、ルールややり方の理解が主にあり、攻防の技術的・戦術的気づきはほとんど見られない。以下の授業者のコメントのとおり、「後ろをむいたり」「床にねそべったり」して有効面を隠す行為もあり、これらの不正が子どもたちから問題提起された。授業者はその解決をするのでなく子どもたちにフィードバックし解決を委ねていた。

単元の開始時は、フェンシングという教材に対しての物珍しさやチャンバラのように剣を使用しながらゲームを楽しめるといった感覚もあり、意欲が高かったように思います。しかしながら、初めて実施をするゲームということもあり、第1時には、いたるところから「このルールはいいのか」や「この方法はせこい」などの発言が多々ありました。的に布を当てられないために後ろをむいたり、床にねそべったりするなどの行為もあり、上手的に布を付けられない児童からは、不満の声があがりました。

以前お伝えしたバランスボールを使用したゲームにおいては、転倒をしたりルールの理解

に時間がかかったりして泣く児童が数名いたのですが、今回のフェンシングにおいては、相手の剣が顔にあたり、痛みを感じて泣いてしまうという児童の1名だけであったと思います。

(授業者コメント第1時)

4-2. 単元中盤

単元中盤(4時間目)では攻防の駆け引きと目される行為が出現した。剣の操作やフットワークがこれに該当するが、その典型的な映像データの取得は困難を極め、本稿での記載は断念した。このことは、攻防の駆け引きが主として心理的な状況の領域に属するからと考えられる。それでも子どもたちが描(書)いた絵日記にはフェイントのような駆け引きをねらったことが表れている。(5項で後述する)

試合中の動きとは別に、顕著な点は試合の運営を自律的にできるようになったことがあげられる。試合の開始・終了はブザーの合図で一斉に伝わる。この時、各ピストでは得点、勝敗、対戦相手を子どもたちで確認しながら行える点で成長が見られた。(写真8)

もとより、技術・戦術面での変化は低学年の学習として目指しておらず、むしろトラブルを解決する中で子ども同士で試合ができるような社会的態度が形成されつつある状況だと感じた。



写真8 得点、勝敗、対戦相手を確認しあう様子

このことについて授業者は次のようなコメントをしている。

単元の中盤は、相手を意識したコメントが児童の言葉の中から出るようになりました。当然

ルールについては、完全に共通理解を図れたわけではないので、不満の声や困ったとの声はありましたが相手を意識した言葉の具体としては、「相手が突撃をしてきたら攻めにくい」、「いろいろな角度で剣をふるとよい」「剣がぶつかると相手の力が分かる」などの言葉です。布的にどちらが先につけることはできたかについての判定でもめることはほとんどなく、引き分けの判断も含めながら勝敗については納得していく姿が見られました。(授業者コメント単元中盤)

上記コメントには「判定でもめることはほとんどなく」「勝敗について納得していく姿」などの社会的態度に関するものの他に「相手が突撃をしてきたら攻めにくい」「いろいろな角度で剣をふるとよい」などの技術・戦術的な気づきも含まれている。このことは本実践において、まずルール理解やマナーの確立を経て、次いで技術・戦術的な学習に至るという学習過程になっていると示唆される。

4-3. 高校フェンシング部の生徒との対戦

近隣の高校フェンシング部の生徒と対戦する授業を1時間実施した。小学2年生32人と高校生(3年生3名、2年生5名、1年生3名の合計11名)が11のグループに分かれ各ピストに高校生1名が入って、小学生と対戦した。ピストの別をA~Kとカラーコーンで示した。(写真9 体育館全景)

この高校フェンシング部は2019年全国選抜大会(学校対抗エベの部)で準優勝した強豪校であり、生徒の中にはジュニアオリンピック日本代表も含まれている。

この授業は、附属小学校(本稿の実践校)で挑戦的に行っている「越境的学習」¹³⁾による体育授業であり小学校と高校が越境して学ぶ趣旨がある。そのため一般的なクリニック(講習会)のように小学生が高校生の指導を受け、「上の者が下の者に教える」ようなフェンシング体験をするということとは異なる。「越境的学習」の大きな特徴である、小学生も高校生も「自文化動揺」「異文化専有」^{注5)}までを想定している。そこで、高校生には「あくまでも指導助言はなし。ただ小学生と対戦するのみ。」ということをも前もって依頼した。



写真9 11のピスト

この授業で試合中見られた特徴的な場面は、小学生が相手に臆せず積極的にアタックを仕掛けていることだった。中にはそれに戸惑う高校生もいた。この授業についての授業者のコメントを以下に示す。

高校生とのフェンシングでは、想像以上のものがありました。あまり具体的な言葉ではありませんが、一つは、体育館の中に醸し出される雰囲気が違いました。小学生同士のわちゃわちゃした感じとは違い、大人に近い高校生と児童が対峙することで、よい空気感がながれていました。児童の高校生に向かう姿勢や高校生が児童を受け入れる姿勢、児童が思いきってやれる安心感などが、よい雰囲気として感じられたのかもしれない。

また、小学生の動きとして、あきらかに無駄が減りました。小学生同士では、お互いに剣をぶつけあうような姿が見られましたが、児童と高校生が行くと、無駄が減り、高校生の懐にすっと入っていく感じを受けました。動きについては、工夫が増えたように感じます。高校生の動きをまねてか、手首をくるくる回したような動きでかけひきをしたり、上下に体を巧みに動かしたりと、高校生が受けてくれるので、だれもが安心して前進して攻撃の機会を設けることができましたようにも思います。

上記コメントでは「高校生が児童を受け入れる姿勢」「よい雰囲気」など交流目的の授業に一定の成果が見られる。また、それだけでなくフェンシングの技術・戦術的な動きとして小学生に見ら

れた特徴を挙げている。それは以下のように列挙できる。

- ・小学生の動きとして無駄が減った。
- ・高校生の懐にすっと入る
- ・手首をくるくる回したような動きでかけひき
- ・上下に体を巧みに動かす

この中で「動きとして無駄が減った」というのは写真10のように両者が構えたまま止まり、互いに間合いやタイミングを図るような状況である。これは高校生がこのような動きをしていたので小学生も徐々に真似するようになったものと推察される。



写真10 高校生との対戦

同様に「手首をくるくる回したような動き」はこの授業の時に出現したので、高校生の動きを真似したと考えられる。

高校生の側がこの実践をどう思ったかレポートに記してもらった。この項の目的をふまえ小学生の試合中の特徴的な動きについて抜粋した内容を以下に示す。

- ・想像以上に動きが速く驚いた。
- ・構え方や剣を回して、どこにどうやって剣を突いてくるか分からなくて点を取られてしまった。
- ・背中を見せ相手に突かせないようにしたり、剣を回して下から突いたり工夫していた。
- ・剣を叩いてきたり、体を沈めてしゃがんで突いてきたりして驚いた。
- ・予想もできない動きがありすごいと思った。

- ・少し後ろに戻ったり、どうしたら点が取れるか考えていた。
- ・小さい体を生かしていた。

小学生の速さに驚いたというコメントが最も多く報告された。これは普段やっていることとは違い、予想できない動きに対する戸惑いも含まれているものと思われる。授業終了後の言葉の中に、そのような難しさが発せられていた。

また、これとは別に「これを機会に少しでもフェンシングに興味を持ってくれたらうれしい」「フェンシングをまたやりたいなど思ってもらえるといい」というフェンシング普及の願いもあった。

さらに、「とても勉強になった。自分も小学生のあの頃に戻りたくなった。」「小学生の積極性は自分のフェンシングスタイルに取り込んで吸収する機会になった」など高校生にとっての学びと考えられるコメントもあった。

5. 絵日記（子どもの内的状況）

子どもたちはフェンシングをどう思ったのかを絵日記に描いてもらった。この項では絵日記の中の否定的・肯定的な文に注目しその対象を考察しながら示す。絵日記の例を図1に示す。



図1 絵日記

絵日記は1時間目と4時間目の2回描いてももらった。1時間目は、まだやり方に慣れていないこともあり、以下のような否定的な内容があった。

- ・最初はフェンシングは難しいと思った。
- ・剣の準備が遅くすぐやめることになって悲しかった。
- ・負けて悔しかった。
- ・1点しかとれず悔しかった。

これ以外の感想では「またやりたい」「たのしかった」などに加えて「かった（勝った）のでうれしかった」「点がとれたのでたのしかった」などの肯定的な内容が大部分を占めていた。体育館に入ってきたときの子どもたちが喜び勇んでゴーグル、ビブス、剣先を装着する光景と併せてみると、本実践でのフェンシングは子どもたちに受け入れてもらったと考える。

また、それだけでなく「小学生同士でやるより高校生とやった方が楽しい」「高校生とできてとてもうれしかった」などの感想からは、高校生との交流を果たすことができたと考える。

絵日記の文中には技術的・戦術的な内容があった。それは前項の試合中に見られた特徴的な場面と高校生のコメントを裏付けるものと言えよう。それを以下に挙げる。

- ・相手が点を入れようとしたときしゃがんでさす。
- ・スピードを速くすると相手はよけられない。
- ・剣の先っぽを持つと長くなるし突きやすい。
- ・相手の動きを見て始めると勝つ。
- ・ジャンプして刺した。
- ・下からくっつけてきて凄と思った。
- ・一回着ける振りをして突く。
- ・時間かせぎをして剣を振り回す。
- ・いろいろな角度に剣を振って相手を困らせる。
- ・後ろを向かれても横のすき間を刺せばいい。
- ・剣を振り回すと相手が攻撃でない。
- ・戻りながら攻めていけばいい。
- ・お腹を隠して相手ができないようにしている。
- ・コツをつかんだ。僕は守ることが得意。
- ・剣を振り回して食い止めるかよけるか、または後ずさりする。

上記コメントにはアタックの他に剣の扱い、フットワーク、守り方などが含まれる。もちろん、これらの内容は教師が指導助言したのでなく、誘導的に発問したものでない。小学2年生でも、

多くの試合数と振り返りの機会から気づけた結果と考える。

これらの他に「剣を刺す場所を腕や背中にしてみたい。」とのコメントもあり、競技フェンシングで言うエペ、フルール、サーブルの有効面に関する内容が連想される。

6. まとめ

本稿では簡略化したフェンシングの授業を小学校2年生の学級で4時間、高校生との越境の学習として1時間行った。教育課程での位置づけを「体ほぐしの運動」の学習とした。その結果、2年生の学級内、高校生との授業を通じて交流目的は果たすことができたと考えられる。加えて、子どもの「またやりたい」という感想からはフェンシングに対する興味関心も高まったと考えられる。それだけでなく、フェンシングに関する技術的・戦術的な気づきも生じ、対戦型として相手と競う学習の成立が示唆された。

7. 注及び文献

注1) 本稿では、学習指導要領に規定された授業として行う体育を教科体育と表している。これに運動部活動や体育的行事を加えると学校体育と呼ばれることが一般的である。

注2) 小学校の各学年や中学校では領域名が異なるので括弧を付して示した。例えば陸上運動(競技)、ボール運動(球技)など。

注3) 中学校学習指導要領では武道は原則としてこの3種目になる。他に空手道、なぎなたなどを行うこともできるが、それらは(3種目に)「加えて」「学校や地域の実態に応じて」「特別の事情」などの条件がともなうので例外としている。

注4) 学習指導要領では低学年の体育の領域・内容のほとんどが「遊び」となっている。

注5) 詳細は「越境する対話と学び」¹⁴⁾に越境的学びの成果として詳述されている。

1) スポーツ庁「オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて最終報告」オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議(https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/

shingi/004_index/toushin/1375094.htm
2020年1月29日アクセス)

- 2) 文部科学省, 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版, pp167-168, 2017年
- 3) 文部科学省, 中学校学習指導要領解説保健体育編, 東山書房, pp195-197, 2017年
- 4) 文部科学省, 高等学校学習指導要領解説保健体育編, 東山書房, pp176-179, 2018年
- 5) 鹿児島県, 「県授業力向上プログラム」研究授業及びパワーアップ研修保健体育科指導案, (www12.synapse.ne.jp/seikan/hotai25-5) 2020年1月29日アクセス)
- 6) 白井市教育委員会, 「指導案書庫」剣道指導案 (<http://www.e-shiroi.jp/center/>) 2020年1月29日アクセス)
- 7) 中央教育審議会答申, 子どもの体力向上のための総合的な方策について, 2007年
- 8) スポーツ庁, 平成30年度全国体力・運動能力, 運動習慣等調査結果, 2019年
- 9) 前掲書2) p43, p75, p120
- 10) コンスタンス・B・ブシャード監修, 堀越孝一監訳「騎士道百科図鑑」悠書館 pp18-49, 2019年
- 11) 全日本剣道連盟, 「剣の理念」(<https://www.kendo.or.jp/knowledge/kendo-concept/>) 2020年1月29日アクセス)
- 12) 前掲書2) p39
- 13) 森 勇示「越境的学習としての体育－附属学校での挑戦的实践－」愛知教育大学研究報告, 芸術・保健体育・家政・技術科学・創作編.2019, 68, p51-59, 2019年
- 14) 香川秀太, 青山征彦編「越境する対話と学び」新曜社 pp35-64, 2015年

8. 謝辞

斬新な授業をいつも実践していただく愛知教育大学附属名古屋小学校の先生方、とりわけ井上歩教諭には特段の謝意を示したい。あわせて2年生の子どもたちと至学館高校フェンシング部顧問教諭と生徒たちにも感謝の意を表す。